

『カラム』と独立準備期マラヤにおける宗教的世界観とナショナリズム

モハマド・ファリド・モハマド・シャーラン

翻訳 鈴木真弓

1. はじめに

20世紀前半、マラヤおよびシンガポールではマレー語の出版物が急激に多く出版されるようになった。この時期の出版物で多くを占めていた話題は、宗教、政治、ナショナリズムに関するものであった。街かどでごく簡単に手に入る新聞に加え、差し迫った話題について議論・提言を行い、読者に考えさせ、人々の考え方に影響を与えるといった性格を持つ定期刊行の雑誌も重要であった。というのも、これらの雑誌はマレー人たちに自分たちの宗教的利益やマレー人という共同体としての利益を達成せねばならないという使命感を植え付ける役割を果たしたためである。当時出版された比較的長命の新聞や雑誌のうち特に重要であるものには、『アル・イスラーム』(al-Islam, 1912年～1931年)、『ペンガス』(Pengasuh, 1918年～1968年)、『アル・イフワーン』(al-Ikhwān, 1926年～1931年)、『サウダラ』(Saudara, 1928年～1941年)、『ワルタ・マラヤ』(Warta Malaya, 1930年～1942年)、『マジュリス』(Majlis, 1931年～1955年)、そして『カラム』(Qalam, 1950年～1969年)がある。

これらの雑誌・新聞の持っていた力は、それらが定期的に発行されたことに加え、斬新なアイデアや最新の情報を紹介・報道することにより、自分たちのまわりで起きている変化について読者を常にアップデートしていたことにある。政治、経済、宗教などのように、マレー人たちにとって重要かつセンシティブな話題が取りざたされた独立準備期のマラヤという社会的文脈において、雑誌は非常に大きな役割を果たしていた。このような背景を踏まえ、本章では、先に名前を挙げた雑誌の1つである『カラム』をとりあげる。独立準備期のマラヤにおいて、この雑誌がいかにマレー人に自分たちの立場を守るための団結の必要性という認識を高めたかについて、イスラームの宗教的世界観とマレー・ナショナリズムという2つの観点から分析す

ることが本論稿の目的である。

2. 雑誌『カラム』とその影響

『カラム』は、イスラームとマレー文化についての多岐にわたる話題をとりあげる月刊誌として1950年7月に発行された。『カラム』は、マレー人たちに対し、ムスリムとしての信仰心を保つように呼びかけ、宗教的にあるべき姿を説いた。また、マレー人たちに対し、ナショナリズムの精神を失わないように警鐘をならした。『カラム』は、このような意味において大きな役割を果たしたマレー語雑誌の1冊といえるだろう。また、1950年代の終わりに、『カラム』を除く全てのマレー語雑誌の表記がローマ字表記に変えたのに対し[Yamamoto 2009: 52]、『カラム』は1969年の停刊までジャウィ文字表記を続けた。

その最盛期、『カラム』は刊行当初の発行地であるシンガポールに留まらず、マラヤ、インドネシア、ボルネオ、タイ南部など、東南アジアにおけるムスリム社会に広く読者層を得ていた。その広範な読者層は、1956年の設立によって『カラム』がその事実上の機関誌となるムスリム同胞団(Ikwan al-Muslimin)の団員名簿に読み取ることができる。

『カラム』は、1950年にアフマド・ルトフィによって創刊された。アフマド・ルトフィは、本名をサイド・アブドゥッラー・ビン・アブドゥル・ハミド・アル＝エドルス(Syed Abudullah bin Abdul Hamid al-Edrus)という。彼は後述するように、『カラム』創刊後に間もなくムスリム同胞団を結成し、『カラム』読者に積極的な参加を呼び掛け、ムスリムたちの同胞意識を高めることによってムスリム・コミュニティの団結を訴えた人物である。

アフマド・ルトフィはアラブ人ムスリムであり、ワルタ・マラヤ社(Warta Malaya)やウトゥサン・ムラユ社(Utusan Melayu Press)にて副編集長の職を経て経験を積んだ後、自身でカラム出版社(Qalam Press)を創設した。彼の思想は『カラム』のビジョンや性格に多

大な影響を与えた。『カラム』に収録されている記事を読めば、読者は彼がマレー人をより進歩的なイスラームの理解に導こうとしていたこと、つまり改革的な思考の持ち主であったことが理解できるだろう¹⁾。『カラム』に収録されている記事の焦点は、ムスリムたちの改革の必要性に当てられ、政治的・社会的状況が変化を遂げている時代を彼らがいかに生き抜くかに向けられていた。

ムスリムは時代を生き抜くための進歩的な思考が必要であると訴えるのに加え、アフマド・ルトフィは、当時マレー人たちがイスラームの精神からの逸脱と捉えられていた伝統的な宗教的儀式を行っていることに對しても批判的だった。より進歩的な考えを読者に植え付け、強化するため、アフマド・ルトフィはマレー・イスラーム世界の内外から改革の思考を持つ論者らの論稿を掲載した。例えば、マレー・イスラーム世界の外からはジャマール・アッディーン・アル・アフガーニー (Jamal al-Din al-Afghani)、ムハンマド・アブドゥフ (Muhammad Abduh)、ファリド・ワジディ (Farid Wajdi) がおり、また、マレー・イスラーム世界の中からはザアバ (Za' ba)、ブルハヌッディン・アル・ヘルミ (Burhanuddin al-Helmi)、ズルキフリ・ムハンマド (Zulkifli Muhammad)、イサ・アル・アンシャリ (Isa al-Asyari) やハムカ (HAMKA) などである。

アフマド・ルトフィが改革的思考の持ち主であったことは、彼がコラムの中で見せるマレー人の政治的・社会的な状況に関する批判的な所見にも見ることができる。彼が特に批判したのが、当時設立されていたマレー人の政治組織である統一マレー人国民組織 (UMNO) だった。アフマド・ルトフィの批判があまりにも痛烈だったため、UMNOの指導者たちは、『カラム』および同じくアフマド・ルトフィによって発行されていた雑誌『ワルタ・マシヤラカット』 (Warta Masyarakat) を公衆の前で焼き捨てるという事態に発展したほどであった [Yamamoto 2009: 55]。

アフマド・ルトフィがイスラームにのっとった改革を切望していたことは、彼の残した小説にも表れている。4年間に25冊の小説を書いた彼の文才もさることながら、彼の書いた小説には、アフマド・ルトフィの持つ断固とした闘争の精神が発揮されているものがある。

1) 『カラム』の他に、アフマド・ルトフィは『アネカ・ワルナ』 (Aneka Warna, 1954年～1959年) や『児童』 (Kanak-Kanak, 1953年) などの雑誌を刊行し、『ワルタ・マラヤ』 (Warta Malaya, 1954年)、『ワルタ』 (Warta, 1953年～1955年) などの新聞を発行したが、いずれも短命に終わった。

る。例えば、『パレスチナでの聖戦』 (Sabil di Palestine) や『1374日間の闘争』 (1374 Hari Berjuang)、『闘争現場からの復帰』 (Balik dari Medan Perjuangan) などがそれである。彼がものを書くときのスタイルは、20世紀初頭の『アル・イマーム』 (al-Imam) や『アル・イクフワン』 (al-Ikhwan) といった雑誌や『ファリダ・ハヌム』 (Faridah Hanum) という小説を通じてマラヤのムスリムに新たな考え方をもたらした著名な近代化論者、サイド・シャイフ・アル・ハディ (Syed Syekh al-Hadi) のスタイルを踏襲している。

3. マレー人統合のための宗教的世界観とナショナリズム

『カラム』の言説に対して影響を与えてきたものとして、相互に関連する2つのテーマが存在する。1つはイスラームの再興とその教えをマレー人に広めるという確固とした動機づけであり、もう1つは独立準備期のマラヤにおいてマレー人の政治的な地位向上のためにマレー・ナショナリズムを高揚させることである。両者は互いに密接に関連しており、一方を取れば他方をあきらめねばならないという関係にはない。以下、『カラム』がとりあげた話題を参照しながら、『カラム』がこの2つのテーマについてどのように論じていたかを見ていきたい。

(1) 宗教的世界観

イスラーム精神の再興という確固たる信念を持つアフマド・ルトフィという1人のマレー人を筆頭に発行された雑誌として、『カラム』はイスラームの宗教的世界観に関して実に多くのことがらをとりあげている。その中でも重要なのが、イスラームの信仰体系である。イスラームにおいて神の唯一絶対性 (タウヒード) は基本原理であり、これに矛盾するすべてのイデオロギーをイスラームは拒絶する。『カラム』には発行当時から無神論の持つ危険性を指摘する論稿が掲載されていた。例えば、「無神論というイデオロギーへの反駁」 (Bidasan terhadap Faham Tak Bertuhan) や、「逸脱的思考に注意せよ」 (Awat Fikiran yang Menyesatkan) などがそれである [Qalam 1950: 9]。それらの論稿の筆者は、他誌の論稿によって広められていた無神論がムスリムの信仰体系をおびやかしかねないとして、その影響を懸念している²⁾。

2) 例えば、マレー語雑誌『マスティカ』 (Mastika) には共産主義についてマレー人たちに提起した記事がある。

もっとも、マラヤにおいて強固だったマレー人ムスリムのコミュニティの間で無神論が実際にどの程度脅威であったかは疑問視される部分もあるだろう。事実、『カラム』に掲載されたこれらの論稿が懸念していた無神論は、共産主義と等号で結びつけられるものであった。一般的に、共産主義は、その教義上、神の存在や宗教の重要性を否定する。共産主義に反対する『カラム』執筆者による主張の背景には、当時マラヤとインドネシア双方で勢力を増し続ける共産主義勢力が両国の政治に影響を与えていたということがある。

特にマラヤでは1930年3月30日にマラヤ共産党(Parti Komunis Malaya)が結成されたことをきっかけに、当初中国系住民に限定されていた共産主義のイデオロギーが低所得者層のマレー人にも及ぶようになっていた。労働組合にはマラヤ共産党の黨員・支持者たちが溢れ、後に彼らは武器をかまえてゲリラ戦を展開するまでに至っていた。1942年に日本軍がマラヤを占領すると、イギリスは抗日的活動を展開するマラヤ共産党を支持・支援したため、同党のマラヤにおける地位は更に高まった[Mohd. Reduan 2008: 1-17]。

『カラム』は、イスラームの信仰体系をマレー人ムスリム・コミュニティに根付かせるのと同時に、イスラームの最も主要な啓典であるクルアーンの適正な解釈のための議論を掲載することを通じて、ムスリムたちがものごとを理解するためのイスラーム的世界観の枠組を強化しようとした。『カラム』に定期的に寄稿していたアブドゥッラー・バスメ(Abdullah Basmeh)は、「クルアーンの秘密とその哲学」(Rahsia al-Qur' an dan Falsafahnya)と題する連載を寄稿し、当時話題となっていたことがらや科学の進歩などについてのイスラーム的世界観に則った解釈をクルアーンに依拠して展開した。また、彼はクルアーンの真の理解を読者に促そうとムハンマドの伝記を分析し、論文を執筆した[Qalam 1951.11: 5]。アブドゥッラー・バスメは、メッカ巡礼、断食、礼拝といったイスラームにおいて基礎とされる実践についての説明も加えている。

『カラム』がイスラーム的世界観に強く影響されていたことは、背教的行為に対して同誌が妥協を許さない立場を取っていることにも読みとれる。例として、1950年12月11日に起きたオランダ人少女ナトラ(Natrah)をめぐる起こされたデモと、この裁判に対する同誌の報道・議論を見てみよう。ナトラは、マラヤのトレンガヌで、マレー人女性アミナ(Aminah)の養女となりマレー人ムスリムとして育てられた。その

後、ナトラと血縁関係のあるオランダ人の両親が裁判所に訴え、彼女をアミナのもとから引き離した。シンガポールの裁判所が両親の訴えを認めたことに反発したマレー人たちはシンガポールで大規模なデモを起こした。『カラム』の見地からすれば、この事件はイスラームの優位性とマレー人による支配に対する脅威であった。アフマド・ルトフィは、この裁判に対して中立の立場を崩さなかったUMNOに対しても批判している[Qalam 1951.2: 17]。

『カラム』は、この事件はマレー人の支配がないがしろにされている例であるとしてマレー人コミュニティの感情を刺激し、また、養女を奪われたアミナへの同情を誘うべく、数号にわたってこの事件を取り上げた。これとは別に、『カラム』はナトラの写真を販売し、その収入を裁判費用の足しにすることで、アミナがナトラを自分の手に取り戻すことができるように画策している[Qalam 1951.1: 2]。例えばある号の『カラム』のキャプションには、次のような言葉が載せられている。「もし彼女[ナトラ]の写真を購入すれば、あなたはイスラームに対する強い責任感を示したことになる。というのも、この収益はすべてナトラの裁判において、(われわれの同胞である)マレー人養母を手助けするために使用されるからである」[Qalam 1951.1: 2]。

また、『カラム』は、マレー人コミュニティで行われていた非宗教的なことがらのすべてを批判し、イスラーム的世界観やイスラームの精神に立ち返ることの必要性をムスリムに示そうとした。例えばアフマド・ルトフィは、州王らが承認し、UMNOの宗教指導者が正当化した宝くじの導入・実施³⁾について政府を厳しく批判している[Qalam 1952.1: 14]。宝くじはマレー人には販売しないことが取り決められていたが、宝くじについての説明書をマレー語で書いて配布する販売者もあり、マレー人には宝くじの販売に怒りを覚えるものがいた。宝くじは「福祉くじ」(loteri kebajikan)と呼ばれ、人々の福祉に資するという崇高な目的を持つとされていたが、アフマド・ルトフィの考えでは宝くじの賞金は非合法な出所からのものであり、したがって宝くじはイスラーム的に違法なものであった[Qalam 1952.1: 14]。

(2) ムスリム・コミュニティ団結への呼びかけ

マレー・イスラム世界のムスリムたちは、長きにわ

3) 宝くじは賭け事であり、イスラームにおいては違法である。クルアーンでは賭け事は非常に大きな罪とされている。

たる植民地統治により、国境によって分けられ、ばらばらになってしまっていた。そのため時代の潮流に残され、1つに団結して行動することができずにいた。そのような時代背景において、宗教の名のもとに団結し、植民地支配からの解放のための闘争を行うというムスリム・コミュニティ団結の呼びかけは、ムスリムたちにとって非常に魅力のあるものだった。『カラム』は、世界中のムスリム代表が集まる会合や集会を積極的に報道することを通じてこの意図を伝えようとした。

一例を挙げると、『カラム』は1950年12月25日にパキスタンのカラチで開催された「東南アジア・イスラーム代表者会議」においてイスラーム大学の創設が呼ばれたことを報じている[*Qalam* 1951.4: 3]。また、『カラム』はパキスタン、イラン、トルコ、パレスチナといった当時ムスリム世界において重要な役割を握っていた各国の代表によるスピーチも掲載している。これら一連の活動に対して冷笑を浴びせるものもいたが、そのようなものたちはアフマド・ルトフィにとって政治的・地理学的な境界を越えたムスリム・コミュニティの団結を否定し、ないがしろにしようとするものたちであった[*Qalam* 1951.4: 3]。

アフマド・ルトフィ自身も、『カラム』を通じてムスリム・コミュニティの団結を実現しようとした。『カラム』読者を主な団員とするムスリム同胞団(Ikhwān al-Muslimin)の結成である。シンガポールのムスリム同胞団は1956年に結成され、同団体の名称は、疑いなく1928年にエジプトでハサン・アル・バンナー(Hassan al-Banna)が創設した同名の団体名を踏襲したものである。エジプトのムスリム同胞団は政治活動と宣教活動で知られ、大衆動員に立脚したイスラーム復興運動を推進した⁴⁾。このことから、エジプトで1940年代末に盛り上がりを見せたこの運動にアフマド・ルトフィが影響を受けていたことは明白だろう。ムスリム同胞団の団員の中には、マラヤやシンガポール以外からも、ボルネオのサバ、サラワクやタイといった他の東南アジア諸国のムスリムたちもいた[Yamamoto 2009: 57]。

ムスリム・コミュニティの団結を図るための他の方法としては、苦難にある他のムスリムたちに対して共感を持たせることであった。『カラム』はカシミールなど苦難の中にある世界中のムスリムの窮状について報道を行った。インドによるカシミールの侵略行為に

4) 1928年にエジプトで結成されたムスリム同胞団(Ikhwān al-Muslim)は、1940年代の終わりには団員数が200万人にのぼったといわれる。

ついて、当地のムスリムが置かれた状況についての記事を担当した記者は、カシミールの状態は「噴火を待つ火山」(Gunung berapi yang akan meletup)であるとしている[*Qalam* 1951.11.7]。

(3)イスラーム・アイデンティティとしての

マレー語とジャウィ文字

既に述べたように、『カラム』は1969年にその刊行を終了するまで一貫してジャウィ文字を使い続けた。その背後には、ジャウィ文字をイスラームのアイデンティティとして保持しようとするアフマド・ルトフィの強い意志があった。ジャウィ文字の使用を維持するため、同誌ではジャウィ文字の重要性やジャウィ文字とイスラームとの深い関わりが幾度も強調されている。例えば、ハムカの名で知られる著名なイスラーム学者で、クルアーンの解釈を行っていたインドネシアのハジ・アブドゥル・マリク・カリム・アムルッラー(Haji Abdul Malik Karim Amrullah, HAMKA)は、「ジャウィ文字を守ろう」(Pertahankan Huruf Jawai)と題する論稿を『カラム』に寄稿している[*Qalam* 1952.2: 43]。ハムカは、文字とは自分自身の思想を表すものと捉え、ジャウィ文字はアラブのイスラームにその起源を持つため、イスラームの世界観を体現するものであるとする。さらに、ジャウィ文字はオランダ人植民地官僚を含めてマレー・イスラーム世界の各地で広く使用されていた。また、ハムカは、ジャウィ文字のローマ字化によってもたらされた混乱について興味深い例を挙げて紹介している。「恵み」を意味するni'matという言葉について、アラビア語をローマ字に転写した際に[nikmat]や[niqmat]と表記されるために、アラビア語のもとの意味と反対の意味を持ってしまうことがあるとする[*Qalam* 1952: 41]。

『カラム』に寄せられた他の記事には、ジャウィ文字の使用を続けることはマレー人という国民共同体(Malay nation)の根幹を支えることであり、その使用を絶やさないと呼びかけるものもある。マレー人はもともとジャウィ文字を用いており、ジャウィ文字は彼らのアイデンティティと切り離せないものであるとし、ジャウィ文字を用いなくなれば、それに関する知識は失われ、最終的にマレー人という国民共同体への愛情を喪失してしまうと論じられた。そのような論調に対し、インドネシアやトルコなど他の強大なムスリム諸国は既にローマ字表記を用いているのだからそれに倣うべきとする意見も存在した。し

かし、ジャウィ文字を守ろうとする論者からすれば、マラヤと他国とでは歴史的背景が異なるためにそのような議論は有効性に欠けるものであり、むしろマラヤは自らの言語を保持することで歴史的・文化的アイデンティティを保ち続ける日本のような国に倣うべきであると考えられていた[*Qalam* 1951.11: 33]。

ジャウィ文字だけでなく、マレー語の強化も『カラム』の重要な関心事項であり続けた。アフマド・ルトフィは『カラム』に権威あるマレー語学者たちの論稿を継続的に掲載した。例えば、ザアバの名で知られ、のちに「学者」(Pendita)という最も権威ある称号を得たザイナル・アビディン・ビン・アフマド(Zainal Abidin bin Ahmad)がその例である。ザアバは、「マレー文芸」(Persuratan Melayu)と題する連載記事を『カラム』に寄稿し、マレー語についての言語学的な解説を行った。

4. ナショナリズムと独立の精神

改めて述べるまでもなく、ナショナリズムとは、あらゆる国家において人々を団結させる重要な要因であった。マレーシアにおいても、植民地支配という環境に生き、また社会・経済的に劣位に置かれたマレー人たちの間でナショナリズムの精神が芽生えた。しかし、マレー・ナショナリズムの高揚に対してより大きな役割を果たしたのは、宗教的指導者に支持され、教育を受けたエリートのマレー人たちであった。彼らはさまざまな団体や政党を結成した。その際にマレー人に独立の精神を広める上で重要な役割を果たしたのは新聞や雑誌などのメディアであり、この点において『カラム』も同様である。

『カラム』のナショナリズムは、次の3つの側面に見ることができる。マレー人コミュニティの団結への呼びかけ、マレー語使用の強調、そして国境を越えた連帯の精神の必要性を説いたことである。

マレー人コミュニティへの団結が呼びかけられたのは、日本の撤退後にマラヤに復帰したイギリスがマラヤ連合を設立しようとしたときだった。イギリスのマラヤ連合構想では、マラヤに居住する各民族がマラヤ連合のもとにまとめられ、民族的な出自に関係なく平等な地位や権利が与えられることになっていた。これに多数派であるマレー人が反発するのは自然なことだった。1946年、マラヤ連合構想に反対するための集会が開かれ、そこでUMNOの結成が提案され、著名なマレー人活動家でジョホール王国の初代宰相を父

に持つオン・ジャアファル(Onn Jaafar)が初代総裁として選ばれた。

『カラム』もマラヤ連合構想を批判する論稿を掲載し、そのような議論の展開に重要な役割を果たした。マラヤ連合設立の動きに対し、強固な左翼的思考と反植民地主義という思考の持ち主で、マレー人の権利擁護において発言力を有していた活動家のブルハヌッディン・アル・ヘルミは、同誌に「マラヤにおけるナショナリズム闘争」(Perjuangan Kebangsaan di Malaya)と題する連載記事を書き、懸念を表明している。また、彼はマラヤ連合構想の脅威を読者に説きながら、その構想はマレー・ナショナリズムの真の目標にのっとっていないと論じた。それどころか、彼によれば、1946年のマラヤ連合構想に反対するために開催された第一回マレー人会議で同意された真のマレー・ナショナリズムを唱えるマレー人の闘争を裏切るものであった。このような考えから、彼はマラヤ連合に賛成するマレー人を、他の民族に譲歩してマレー人コミュニティの分裂をもくろむものであると捉え、批判していた。彼はまた、マレー人の権利を支える存在であった州王たちに対しても譲歩することなく、真のマレー人たちを支援するように求めた。

『カラム』が批判の対象としたマレー人指導者の1人に、皮肉にもマラヤ連合を支持する立場に回っていたUMNOの初代総裁オン・ジャアファルがいた。ペラのクアラカンサルで開催された会議において、オンはマレー人の州王や役人、そしてマレー人が全体としてマレー人コミュニティの団結を阻害していると主張した。さらに彼は、シンガポールでナトラ事件をきっかけに起こったデモについて、マレー人によるそのような行為は異国の影響を受けたものであり、マレー人はやみくもにデモに参加しただけだと述べた[*Qalam* 1951.11]。『カラム』誌上で「騙されるな」(Jangan Terpedaya)と題した記事を執筆・掲載したアフマド・ルトフィは、そのようなオンの主張を厳しく非難している。アフマド・ルトフィはオンの主張に対して根拠を求め、またオンのそのような主張の背景には政府を経済的に支援する非マレー人グループを喜ばせようとする意図があると述べた。アフマド・ルトフィによれば、オンによるこのような主張こそマレー人の団結にひびを入れるものであった[*Qalam* 1951: 7]。オンの立場の変化に対し、『カラム』はアフマド・ルトフィ執筆のコラムを筆頭に批判し続け、「崩壊をもたらす支援」(Sokong Membawa Rebah)というマレー語の諺

を引用してマレー人の団結を阻害するやり方を批判した[*Qalam* 1951.2.32]。UMNOを全マラヤ人政党として非マレー人にも開放するというオンのアイデアは一般のマレー人にもUMNOの黨員にも受け入れられることがなく、1951年8月に彼はUMNOを脱退してマラヤ独立党(Independence of Malaya Party)を結成し、さらに1954年に国家党(Parti Negara)を結成した。しかし、概してマレー人の賛同を得ることはできず、より包摂的な社会を建設するという彼の目標が達せられることはなかった。

真のナショナリズムの精神はイスラームに連なるという主張を展開するため、『カラム』にはイスラームとナショナリズムの調和を論じる記事や、イスラームにおける政治の位置付けなどを述べる記事が連載された[*Qalam* 1951.4: 16]。これは、ナショナリズムを狭い理解から捉えてイスラームの教えにそぐわないものと捉えようとする理解に対して先手を打ったものであった。

この議論を支持するため、イスラームを国教にする必然性についてのインドネシアのモハマッド・ナツシル(Muhammad Natsir)元首相による演説が『カラム』誌上に掲載された。この演説は、イスラームを国教とすることに反対していたオンへの批判という意図を持って掲載された。『カラム』編集者は「政治とナショナリズム」(Siyasah dan Kebangsaan)の記事において、エジプトのターハ・フセイン(Taha Husayn)元教育相による正義などの基本的な政治的概念をイスラームにのっとして説明したり、イスラームにおける政治について歴史を追って述べたりしている[*Qalam* 1951.3: 5]。『カラム』による彼の演説の掲載は、宗教は儀式的側面に限られるというマレー人の理解に一石を投じるという意図を持つものであった。

「言葉は民族の魂なり」というマレー語の成句が示すように、マレー語は疑いなくマレー・ナショナリズムを象徴するものであり、マレー人コミュニティを団結させるための要因だった。『カラム』においてもマレー語の重要性は強調され、それは例えばザアバといった著名なマレー言語学者によるマレー文学の連載に見ることができる。「マレー文芸」などの彼の作品の連載により、『カラム』はより多くの読者を惹きつけた。そしてこのことは、読者の間のマレー・ナショナリズムをより高めることになった。

ムスリムの地域的な連帯を確立しようという本誌の気概は、『カラム』に掲載・報道されているニュース

や記事にはっきりと読みとることができる。例えばインドネシアの独立や新政府、そしてインドネシアの大臣の伝記なども多く『カラム』誌上で特集されている。同様に、パキスタンなどの他のムスリム諸国の独立記念日についても掲載されている[*Qalam* 1951.10: 8]。

5. むすび

本章では、独立準備期のマラヤにおいて、宗教的世界観とナショナリズムという2つのテーマがマレー人コミュニティの団結に重要な役割を果たしたことを述べてきた。アフマド・ルトフィは、マレー人コミュニティの団結を阻害する原因は共産主義の影響やオンなどのマレー人政治家たちの発言の他にもあると考えていた。例えば、マレー人が自分たちを取り巻く社会的状況に対して深く考え、理解しようとしなかったことや、一部のマレー人に見られる個人主義的思考などだった。アフマド・ルトフィは、マレー人指導者にマレー人コミュニティで起きている問題について真剣に議論してほしいと願っていた。また、彼はマレー人が左翼や右翼といった思想的立場の違いを捨て、マレー人として団結して自分たちの地位を守ることを望んでいた。さらに彼は、もしマレー人がばらばらの状態で団結しなければ、非マレー人たちがこの状況を良い機会と捉え、結果的にマレー人コミュニティのさらなる弱体化につながると懸念し、マレー人たちに注意を喚起した。このように、『カラム』は、独立準備期のマラヤにおいて、マレー人ムスリムが自分たちの運命やマラヤ独立への闘争に関して自分たちの考えや切実な願いを掲載した稀有な資料であった。

参考文献

- Mohd Fadl Allah Suhaimi. *Peliharalah Tulisan Melayu*.
Mohd Reduan Asli. 2008. *Pemberontakan Bersenjata Komunis di Malaysia*. (2nd edition.) Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
Yamamoto Hiroyuki. 2009. "The Jawi Publication Network and Ideas of Political Communities among the Malay-Speaking Muslims of the 1950's". *Journal of Sophia Asian Studies*. No.27.